



TITLE:

<批評・紹介> 岩村三千夫・野原四郎共著「中國現代史」

AUTHOR(S):

小野, 勝年; 上田; 寺田; 近藤; 大戸; 山口; 金田

---

CITATION:

小野, 勝年 ...[et al]. <批評・紹介> 岩村三千夫・野原四郎共著「中國現代史」. 東洋史研究 1955, 13(6): 532-534

ISSUE DATE:

1955-03-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/139024>

RIGHT:

## 中國現代史

岩村 三千夫・野原 四郎 共著  
一九五四年十一月 岩波書店  
新書版二四三頁 百圓

私たちは大きな期待を以てこの本を迎えた。このことは單に私たちが東洋史を學ぶものゝ立場からだけではなく、むしろ私たちをも含めての國民全體の立場から云い得ることであろう。昨年一年間の新中國の飛躍的發展は國民の中國への關心を著しく昂め、中國との平和的共存の問題が、國の政策をも動かさずにはおかぬ勢で擴がっていった。

それだけに古い中國がどの様にしてそうなったのか。そして中國をこの様に變えた力は一體何であつたか——この問題（現代中國が歩んで來た道を正しく知ること）は「中國を無視した平和の考えられない」、「世界の必要」であることはもちろん、とりわけ日本國民の極めて切實な課題なのである。この時大衆的な新書版で「現代中國史」が出版されたことの意義は誠に大きい。

扱っている範圍はアヘン戦争前からジュネーヴ會議に至る百年餘であり、現代史として當然比重を二十世紀以降におきつゝ、全體を

段階的に七章に分っている。即ち「舊中國の解體（—同治中興—）、Ⅱ 共和國への道（—辛亥革命—）、Ⅲ 新民主主義段階の開始（—五四運動—）、Ⅳ 第一次革命戦争（—國民革命—）、Ⅴ 十年の内戦（—西安事變—）、Ⅵ 抗日戦争（—八・一五—）、Ⅶ 中華人民共和國の成立（—現在—）」から成り、最初の二章が野原氏、残り五章が岩村氏の執筆にかゝる。著者の主旨からいってもこゝで細々と内容を辿る事は避けることにするが、百餘年に亘る外國勢力と國內の封建的實辦的勢力による殘酷な半植民地的半封建的支配に對する中國人民の不屈の抵抗——それが太平天國などの農民戦争から義和團の反帝運動、一轉して孫文等民族ブルジョアジの指導による革命運動、更に十一月革命を契機とする新しい世界史的段階の中での五・四の反帝反封建運動、共產黨の結成、國共合作による北伐、最後に勞農同盟を主力とした新民主主義革命勢力が、抗日戦争と國民黨に對する解放國內戦争の過程を経て、輝かしい勝利を獲得する迄の中國革命の歴史——を著者はこの中で書いている。

こゝで、著者が中國革命史の中に頭を突込んでしまうことを避け、各時期、各事件に對しても常に國際的視野から照明を當てられていくこと——しかもそれが單なる國際的關聯というだけではなく、常に中國革命を世界史的關聯に於て把握しようとしてされていること、このことは極めて高く評價されなければならないと思う。各章の冒頭にその時期毎の年表を収めたことも、その目新しさとともに成功した試みといえよう。

しかし讀み終えてみると、多くの點で教えられながらやはり何か物足りなごの感を禁じ得なかつた。もちろんこの小著に中國近代史の現狀として止むを得ない多くの問題點があること——中國に於け

るマニユファクチュアールの問題（p.8）、買占業者の資本の産業資本への轉化という問題（p.8）、外國資本の中國への浸透の状況など。

しかし私たちはこの小著に過度の學問的嚴密さを要求するつもりはないし、又個々の問題に立入って批判することは、私たちの學力以上のことでもあるので、とにかく全般に亘つての問題點を（出来るだけ具體的な事實に即しつゝ）取上げることになしたい。

まず第一に、中國近代の社會經濟を、とにかく著者なりに一應整理され、それとの關聯に於て政治史を論じられようとした意圖——特に前半——はとにかくとして、やはりそれが内的必然性に於て捉えられたとはいえない。例えば阿片戰爭後に擴がって來る平英國、昇平社學などの民團の反英鬭爭に對して、こゝで一應設定されているマニユファクチャー資本家などは一體どういう反應を示していたか。太平天國の敗因を外壓と支配階級の實辦的結合及び太平天國側の宗派主義として片附けられているが、この様な宗派主義を生み出して來る太平天國內部の階級構成はどうなのか、又五・四以後に於ける經濟ストから政治ストへの轉換が労働者の意識面に於ける成長という形で捉えられているが、當時の經濟鬭爭がそのまゝ、反帝的性格を帯びざるを得なかった必然性はどうなのかという問題、こうした問題が明らかにされ、ひとつひとつのたゞ、かゝいが、當時の具體的な社會經濟的條件の中に正しく位置づけられない限り、「民衆のあまりにも深い苦しみ、あまりにも烈しい受難、そしてそれにもめげず立上つていく人民の抵抗」。（序文）ということも結局主觀的抽象的なものに終つてしまふのではないだろうか。

第二にこの様にして夫々に覆いかぶさつてくる苦難の中で、分裂と動搖をつゞけながら、しかし夫々なりに「中國人の中國」を追求

していく生々とした人間の動き、そしてそういう「人民の力というもの」が正しく組織された時にどんなに巨大なものに變つていくか」という、「日本人が中國近代史を通じて、もつとも學ぶべき點が次第に抜きにされている。中國人民の闘いがどう積み上げられ何を後世に傳へて行つたか、歴史の發展法則の追究に弱いのではなからうか。例えば義和團の反帝運動は、「改良派の失敗」によつて、「民衆が自分で立上つて中國の危機を救うはか道がないことが明らかとなつた」。この中から出て來るとされ、こゝに至る迄のひとつひとつの苦しい民衆のたゞ、かゝいが評價されていない。したがつて義和團を経てはじめて同盟會という、曾つての祕密結社とは質を異にした組織が出て來る必然性も明らかにされてこないこと。又辛亥革命以後、外國帝國主義と、その代理人たる袁世凱の軍閥支配という追いつめられた袋小路の中で中國の人民がどうたゞ、かゝいをすゝめていったかという苦悶は出て來ないで、突然、五・四運動のあざやかな展開が述べられること。又孫文に於ける舊三民主義から新三民主義への展開が、單に五・四及び中共・ロシア人顧問らの影響とされ、彼なりに革命への途を模索していつた孫文一派の主體的な自己改造の過程は取上げられないこと。全體を通じて農民の闘いの具體的な姿は浮び上つてこないで、中國に於ける民族解放鬭爭が、労働同盟を基礎とする革命勢力によつてすゝめられなければならないが、必然性が明らかでないことなど。特に後半に於ては民衆は歴史の彼方に追いやられて恰かも中國共產黨史の觀を呈している。もちろん中國共產黨がこの時期に於て擔い得た主導的役割からして、そのことは當然であるにしても、中國革命を下から支えたひとり／＼の民衆を抜きにしては中國共產黨史もあり得なくなるだらう。

三にこの様な弱さの出で来るひとつの原因として日本人としての立場が閑却されていることである。結局著者たちは、「中國の今日の動きを理解するために」中國を知らねばという「世界の必要」の立場から書いていたのであって、曾つての中國と同様な植民地化の苦しみの中で、自からを解放する途を眞剣に模索している日本人の立場から書いているのではない。日本人として中國現代史の中に何を學ぶかという問題意識の不鮮明さ——序文では一應正しく提出されていながら、それが具體的になつていないこと——が後半に於ては生起する事件にひきずりまわされる結果となり、現實の中國革命の成果の上に腰をすえてしまう結果となつたのではないか。

全く望蜀の言だったのであるが、失禮をも顧みないで、感じたままの印象をのべて來た。いすれにしろ、最近出版された中國に於ける諸研究、諸種のルポルタージュ等の成果をいちはやく、これだけのものにまとめ上げられた著者の努力に對しては全く感謝の外はない。私たちはこの本の成果を十二分に利用させていただき、そして中國近代史をより豊かなものにしていくために努力しなければならぬと思う。

近代史グループ

(小野・上田・寺田・近藤)  
(大戸・山口・金田)